

ニック・ランドと 新反動主義

現代世界を覆う〈ダーク〉な思想

木澤佐登志

現代思想界 の魔王

ニッ ク ・ ラ ン ド を 知 ら ず し て

10 年 代

20 年 代

現 在 と 未 来 は 語 れ な い

世界に決定的な影響を与える闇の思想家はいかにして
生まれてきたのか？ あのピーター・ティールから遡る
その新反動主義・加速主義の全貌日本初上陸

ニック・ランドと新反動主義

現代世界を覆う〈ダーク〉な思想

木澤佐登志

星海社

153



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

オンライン掲示板兼コミュニティの Reddit に「ダーク・エンライトメント」(in Dark Enlightenment) というコミュニティが存在する。「暗黒啓蒙」と訳せるこのコミュニティには、2019年4月時点で1万5千人を超えるユーザーが参加している。トップページの概要には、「平等主義という進歩的な宗教から生じた近代世界の醜悪な情況について議論するための場所」であることが記され、「普遍的な欺瞞^{ぎまん}が蔓延している時代においては、真実を語ることは革命的な行いとなる」というジョージ・オーウェルの言葉が引かれている。

トップページをスクロールするとコミュニティのユーザーが共有している思想についてのさらなる詳細な説明を読むことができる。その中には、たとえばヘカテドラル(The Cathedral)と彼らが呼ぶコンセプトが出てくる。彼らによれば、現代の世俗的な進歩主義は、ピューリタンのカルヴァン主義の末裔であり、この進歩主義の意匠をまとった宗教は、

政治家、ジャーナリズム、教育機関などを通じて社会に影響力を行使しているという。

こうした視点に基づき、彼らは「社会正義」や「平等主義」に矛先を向ける。彼らに従えば、こうした「道德」観念は近代的な進歩主義という名の宗教が生み出している欺瞞にすぎない。対して、彼らは生得的な差異や能力に基づいたヒエラルキーに価値を認める。それ以外にも、近代以前の伝統的な文化や価値観には、それ相応の合理的な存在理由があると主張する。たとえば、文化は長い年月をかけてそれぞれ地理的に独立して熟成されてきた。それらは同一の価値観に基づき、隣接した文化と競合しながら、生き残った文化が文明を形成していった。だから、それらにはその社会や土地に根付いた、単なるイデオロギーを超えた必然性があるのだという。

ここから、民主主義という名の大衆迎合的なシステム兼イデオロギーの否定、そして独立した小都市国家が乱立する政治システムこそが最善であるという結論に至る。それら都市国家は企業的な競争理念によって運営され、住民は自由に所属する都市国家を選択することで都市国家の間で競争が発生するようにする。つまり、都市国家を運営する者は住民の要求に応え満足させるインセンティブが発生する……云々。

以上に記したこの奇妙な(?)思想は新反動主義、あるいは暗黒啓蒙と呼ばれる。新反

動主義の支持者には、たとえばドナルド・トランプ大統領の元側近ステイブ・バノンなどがおり、現在のオルタナ右翼と呼ばれる思想にも多かれ少なかれ影響を与えているとされる。本書は、主にこの新反動主義の形成に寄与したと思われる三人の重要人物——ピーター・ティール、カーティス・ヤーヴィン、そしてニック・ランド——にそれぞれフォーカスを当てることで、新反動主義のエッセンスを取り出すことをさしあたりの目標とする。以下では本書の簡単な見取り図を提示しておこう。

第一章では、ペイパル創業者のピーター・ティールを取り扱う。彼がシリコンバレーで育んできたリバタリアニズム思想は、白人男性的なエリート主義と結びながら啓蒙と民主主義の否定に向かう。そして「自由と民主主義はもはや両立できると信じていない」と宣言するに至る。

第二章ではシリコンバレーの起業家カーティス・ヤーヴィンがブログ上で展開し、やがて新反動主義と呼ばれることになる思想を紹介し、それがイギリスの哲学者ニック・ランドの「暗黒啓蒙」へと繋がっていく流れを辿る。

第三章では、ニック・ランドの思想的変遷を80年代から追っていく。その中で、90年代におけるCCRUという活動がその後のさまざまな潮流の源泉のひとつであることを確認

する。ダブステップ、思弁的実在論、加速主義……、これら現在にまで様々な影響を与えている諸潮流を取り出してみることで、新反動主義に必ずしもとどまらない混沌とした思想地図を描きたい。

第四章では加速主義にフォーカスを当てる。資本主義に対する唯一のラディカルな応答は、批判でも抵抗でもなく、反対に資本主義のプロセスを限界まで推し進めることである、という態度に要約される加速主義は、マルクスを端緒^{たんしよ}とし、70年代のドウルーズ&ガタリ、そして90年代のニック・ランドにおいてひとつの頂点に達する。また、章の後半では、ヴェイパーウェイヴと呼ばれる音楽ジャンルを検討しながら、なぜこのような異端的な思想が現在でも一定のプレゼンスを得ているのかを探っていく。その過程で見えてくるのは「失われた未来」というキーワードである。

もとより、この小著で新反動主義の全体像や系譜的流れをすべてカバーできるとは思っていない。それでも、この本が新反動主義の見取り図に少しでも貢献できれば幸いである。

目次

はじめに 3

1^o ピーター・テイル

13

ピーター・テイルとは誰か 14

ルネ・ジラールへの師事 17

学内紛争にコミットする 21

主権ある個人、そしてペイパル創業へ 27

ニーチェ主義とテイル 36

暗号通貨とサイファーパーンク 41

「イグジット」のプログラム 47

「ホラー」に抗う 50

啓蒙という欺瞞、そして9・11 55

暗黒啓蒙

59

リバタリアニズムとは何か 60

「自由」と「民主主義」は両立しない 67

カーティス・ヤーヴィンの思想と対称的主権 70

新官房学 80

反近代主義とその矛盾 86

人種問題から「生物工学の地平」へ 94

3 ニック・ランド 101

啓蒙のパラドックス 102

ドゥルーズ & ガタリへの傾倒 108

コズミック・ホラー 115

グレートフィルター仮説 119

クトゥルフ神話とアブストラクト・ホラー 122

死の欲動の哲学 129

CCRUという実践 134

CCRUとクラブミュージック 139

ハイパーステーション 145

思弁的実在論とニック・ランド 148

カンタン・メイヤスー 151

レイ・ブラシエ 156
ニック・ランドの上海 158

4 加速主義 163

加速主義とは何か 164

左派加速主義とマーク・フィッシャー 171

右派加速主義、無条件的加速主義 178

トランスヒューマニズムと機械との合一 183

加速主義とロシア宇宙主義 186

ロコのバジリスクと『マトリックス』 192

ヴェイパーウェイヴと加速主義 201

ヴェイパーウェイヴと亡霊性 207

ノスタルジーと失われた未来	214
未来を取り戻せ？	217

あとがき	222
------	-----

参考文献	230
------	-----

ピーター・
テイル

Peter Thiel

1

世界最大のオンライン決済サービス・ペイパルの共同創業者、フェイスブックを創業から支える外部投資家、シリコンバレーで大きな影響力を持つペイパル・マフィアを束ねるドン、ドナルド・トランプの熱烈な支持者、そして新反動主義に靈感を与えた異端的リバタリアン……等々。

いくつもの顔を併せ持つ男、ピーター・ティール (Peter Thiel)。しばしば矛盾した面すら見せるティールの解きほぐしがたさ、とっつきにくさは、そのまま新反動主義 (Neoreaction: NZB) なる不透明な思想動向の解きほぐしがたさに直結しているように思える。

意外なことに、ティールは学部生時代、哲学を専攻していた。彼はスタンフォード大学でルネ・ジラルド (René Girard) の講義に出席し、ジラルドの著書『世の初めから隠されていること』を読みふけた。同書は彼の思想にも大なり小なり影響を与えている。また、同時期に大学内で巻き起こった人文系カリキュラムを巡る学内抗争においては、ティールはみずから学内新聞を発行して積極的に論陣を張っていた。この頃のティールは、現在のイメージと異なり、論客や言論人、もつといえど思想的な傾向を持っていた。

ティールの思想形成を辿っていくことで、その後のティールの幅広い活動の根底に横た

わる一貫した「思想」の過程を取り出してみること。言ってみれば、ピーター・ティールを「思想家」として扱ってみること。そして、その作業を通じて新反動主義のエッセンスを少しでも抽出しようと試みることに。これが本章のさしあたりの目標である。

ピーター・ティールは1967年10月11日、西ドイツのフランクフルトでドイツ人として生を受けた。ティールの父は科学エンジニアで、各地の鉱山会社で工程管理の仕事をしてきた。そのため、一家は引越しを繰り返す生活を送っていた。ティールが1歳のときに一家はアメリカへ移住。そして6歳のとき、父親がウラン鉱山で働くことになり、一家はアフリカ・ナミビアのスワコプムントへ移住する。1973年、折しも第一次オイルショックがアメリカを直撃していた時期にあたる。

かつてはドイツ領だったこの小さな湾岸都市で、ティールはチェス盤とフランスのコミックと世界地図とともに暮らした。スワコプムントの学校の厳しい規則は彼を苦しめ、幼いながらも抑圧に対する反発心を目覚めさせた。自由を何よりも求める彼のリバタリアンの傾向は、この頃にすでに胚胎はいたいしていたのかもしれない。

ティールが9歳のときに一家はアメリカに戻り、10歳の1977年にカリフォルニアの

フォスターシティに住まいを移す。フォスターシティはサンフランシスコ湾の海辺に建設された計画都市で、当時はまだサンノゼからサンフランシスコにかけてのびる半島が「シリコンバレー」と呼ばれることもほとんどなかった。しかし、すでにアップル、ヒューレットパッカード、インテルなどの企業がこのエリアに本拠地を置き、爆発的な成長を遂げようとしていた。1977年といえば、アップルがパーソナルコンピュータ、アップルIIを発表した年だ。コンピュータを個人が所有する、そんな時代が本格的に到来しようとしていた。

ティールはこの揺籃ようらんの地で、70年代の終わりから80年代にかけてを多感な十代として過ごした。チェス、数学、SF小説、コンピュータゲームに興じた。チェスの才能はめざましく、13歳未満の部門で全米7位に入った。フィクションではトルキンの『指輪物語』と当時劇場公開がスタートした『スター・ウォーズ』シリーズが大のお気に入りだった。1985年、地元の高校を優秀な成績で卒業したティールは、フォスターシティからほど近いスタンフォード大学へ進学することを決める。スタンフォード大学は当時、シリコンバレーという注目を集めるエリアの中心的な存在だった。

のちにティールは当時を振り返りこう語る。「1985年を振り返ると、とにかく楽観的

でした」。彼の中にはこれといった明確な進路や目標が存在しなかった。「私が方向性を決めずにいたのは、何でもできるという自信があったからです。（中略）将来についてあまり具体的になる必要はないと思ったのは、80年代の樂觀主義の表れです。私の望みは何らかの形で世界に影響を与えることでした」（ジョージ・パッカー『綻びゆくアメリカ 歴史の転換点に生きる人々の物語』）。

ルネ・ジラールへの師事

「何らかの形で世界に影響を与える」ためのツールとしてティールが選び取ったのは、意外なことに哲学だった。彼はスタンフォード大学の哲学科で、フランスの哲学者ルネ・ジラールと出会い、そこから決定的な影響を受けている。のちにティールは、ジラルルの著書『世の初めから隠されていること』を生涯の一冊に挙げ、自身の思想形成の土台を成していることを公言している。

ルネ・ジラールは、ある社会や共同体において「暴力」がどのように機能しているかを、人類学や宗教学の見地から解きほぐしたことで知られる。ジラールによれば、法体系を持たない未開の社会では、共同体内でひとたび暴力が発生すれば、それは復讐の連鎖となっ

て共同体を最終的に絶滅に追いやる。この「相互的暴力」の伝染を防ぐために共同体がとる解決策が供犠くぎというシステムである。共同体の全員が満場一致で成員の一人を身代わりとして、すなわち贖罪しよくざいの生贄いけにえとして共同体から追放する。この共同体の内部から暴力を浄化する供犠という儀式を通じて、共同体に安定と秩序がもたらされる。この暴力を追放する暴力は「創設的暴力」とも呼ばれる。ジラールの見立てによれば、人間によるすべての社会や共同体は、一見すると安定していても、その始原にこの暴力を放逐ほうちよくする根源的暴力、すなわち「創設的暴力」を覆い隠しているという。たとえば、ジラールは『福音書』におけるキリストの磔刑たつけいを、そのような秩序創設の根源に隠された暴力の物語として読み替える。つまるところ、ジラールによれば、どんな社会も共同体も国家も暴力によつて成り立っているのだ。

それでは、私たちが何らかの集団生活を営んでいる限り、この「創設的暴力」という名の原罪から逃れるすべはないのだろうか？ もちろん、ある、とジラールは言う。それは「信仰」だ。「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」（マタイ、5の44）。信仰に基づく暴力の無条件的な放棄だけが、人類を真の平和と高みへと導いていくだろう……。

このような敬虔なクリスチャンとしてのジラールの教えが、保守的な福音派の家庭で育

ったテイルにどのような感情をもたらしたのかは定かでない。しかし、テイルを含む、明確な信仰を持たない現代のシリコンバレーの若者たちにとっては、ジラルルの思想は一種の出口の見えないデイスピアとして響いたかもしれない。

『世の初めから隠されていること』では、模倣（ミメシス）の観点から暴力のメカニズムが考察されている。人間は、他者の欲望を模倣する生き物である。というのも、欲望とは、畢竟するに他者の欲望だからだ。たとえば、あなたが何か高価な宝石を欲望するとき、それは宝石そのものが美しいから欲するのではなく、皆がその宝石を欲しがっているから欲するのだ。こうした欲望の模倣と連鎖は、不可避免的に苛烈な競争と暴力の連鎖を生み出す。ジラルルに従えば、人間の欲望とは、究極的には死へと向かう欲望なのだ。

すべてのものが死へと集束していきます。フロイトの思想のように、またフロイトと同じようにそこに本能のようなものを認めようと信じている動物行動学者の思想のように、そうした集束の傾向に注目している思想もまた、死へと集束していきます。あるいはまたおそらく、宇宙の進化全体を特徴的にあらわすあの有名なエントロピーへの傾向も例外ではないでしょう。

もしわれわれ人類の上にのしかかっている脅威が、ある本能から生まれたものであり、人類の歴史のありとあらゆる災難が、非情な科学の法則に特有な一様相にすぎないのだとすれば、われわれを運び去る動きに身をまかせるほかに道はないということになります。相手はわれわれの思いどおりにはならない運命なのですから。

（ルネ・ジラール『世の初めから隠されていること』）

文中に出てくる「われわれ人類の上にのしかかっている脅威」とは、おそらく当時の核戦争の脅威を念頭に置いている。この、死の欲動を宇宙の法則であるエントロピーにまで敷衍させるジラルルの暗いビジョンを、テイルルは一種の天啓として受けとめた。

彼は、これまでの競争に明け暮れた生活を顧みた。学校では常にトップの成績を目指し、チェスでは相手を打ち負かすために寝食を忘れた。「人はさまざまなモノを求めて激しく競争します」と彼は言う。「ところが、ひとたび手に入れると少しばかり失望する。なぜなら、どうしてもほしいと思うものは、だれもがほしがっているという事実に突き動かされるからであって、必ずしも魅力のあるものではないからです。私は、だれよりもその罪を犯していたので、ジラルルの理論を積極的に取り入れようとしたのです」（『綻びゆくアメリカ

カ」。

ただし、ティールはジラルルと異なり、「信仰」に競争と暴力からの脱出の糸口を見出せなかった。代わりに、暴力に基づく共同体からの解脱^{げだつ}は、端的にその共同体から「脱出」することによってなされるとティールは考えた。この考えは、ティールの現在まで貫かれる経営理念や起業家精神、そして特異なりバタリアニズムにまで影響を与えている。

学内紛争にコミットする

またこの時期、ティールはスタンフォード大学における人文系カリキュラムを巡る学内紛争に積極的にコミットすることを通じて、そこでも自身の思想的土台を形成していた。

80年代後半のスタンフォードでは、「西洋文化」と呼ばれる必修科目を巡り学生内でも対立が激化し、さながら60年代の大学紛争が奇妙な形で再来したかのようだった。マイノリティとリベラルな学生たちは、人文系カリキュラムがアリストテレスやシェイクスピアといった「死んだ白人男性」たちによって占められていることに憤った。彼らは、白人的な西洋中心主義ではない、「文化的多様性」や「ジェンダー」の観点を取り入れたカリキュラムを導入すべきだと主張した。それに対して、ティールを含む保守派の学生たちは、リ

ベラル学生がカリキュラムを利用してスタンフォードに左翼思想を吹き込もうとしていると激しく反発した。学生間の対立は激しくなり、ある学生グループはスタンフォード大学の学長室まで占拠した。

こうした事象は、当時のアメリカ国内のキャンパスで沸き起こっていた「ポリティカル・コレクトネス」を巡る抗争的一幕といえた。ポリティカル・コレクトネスは、日本語では「政治的公正」、あるいは「政治的に正しい言葉遣い」などと訳され、その言葉の通り、政治的／社会的に公正・公平・中立的で、なおかつ差別・偏見が含まれていない言葉や態度のことを指す。近年ではドナルド・トランプが、このポリティカル・コレクトネスを痛烈に批判したことが記憶に新しいが、最初にこの言葉が広く論争的になったのは、ティールがスタンフォード大学に在籍していた、まさに80年代後半から90年代初頭にかけての大学キャンパスにおいてであった。

なお、その際に大きな影響力を持った書物に哲学者アラン・ブルーム (Allan Bloom) の『アメリカン・マインドの終焉 文化と教育の危機』(1987)がある。ブルームは、ポリティカル・コレクトネスという言葉こそ用いていないものの、同書の中でアメリカの大学教育における近年の進歩的傾向を、伝統主義者の立場から嘆いてみせた。ブルームにとつ

て、キャンパスにおける悪しき相対主義に基づいたカリキュラムの多文化主義化は、西洋の偉大な精神をないがしろにすることであり、それは取りも直さず教育の墮落を意味していた。

さて、ティールは二年生の終わりの1987年6月、友人と共同で『スタンフォード・レビュー』という学生新聞を創刊、みずから論陣の前線に切り込んでいく。この学生新聞はスタンフォードの保守派の牙城^{がじょう}をなし、資金面ではネオコンの父と呼ばれるアーヴィン・クリストルが1978年に保守派学生の活動を支援するために立ち上げた組織からの援助があった。ティールはこの新聞の編集長として、記事の方向性を基礎づけていった。すなわち、進歩派に対する攻撃と、リベラルな学生と教授陣、そして大学当局に蔓延する「ポリティカル・コレクトネス」に対するシニカルな嘲笑である。

キャンパスの文化戦争は全米に広まっていた。1987年初頭には民主党の大統領候補がスタンフォードを訪れ、学生を率いて「西洋文化はもうたくさんだ!」と叫びながらデモ行進を行った。一方ティールの『スタンフォード・レビュー』は、レーガン政権の教育長官ウィリアム・ベネットを招いて学内で講演会を開き、大学が推し進めようとする行き過ぎた進歩的改革について意見を仰いだ。「偉大な大学がおとしめられました」とベネット

は述べた。当時はレーガノミクスの時代であり、保守思想と新自由主義経済政策が影響力を持っていた。ティールはもちろん一貫してレーガンを支持していた。

ティールが大学を卒業しロースクールに進学したのちも文化戦争は続いた。ティールの友人デイヴィッド・サックス (David Sacks) が『スタンフォード・レビュー』の新たな編集長に就任すると、同紙は「言論の自由」、ジェンダー、セクシュアリティといった論点に戦線を移していった。もちろん、その際の主な攻撃対象もポリティカル・コレクトネスであった。一部の学生にとってポリティカル・コレクトネスとは、結局のところ言いたいことを言うことができる権利の制限、言い換えれば自由の圧殺を意味していた。たとえば、ティールのとある友人は学内の言論の自由の限界を検証するために、同性愛者の講師の自宅の前で「このホモ野郎！ エイズになって死んじまえ！」と叫んだ。この友人はスタンフォードから追放されたが、ティールらはこの事件を「魔女狩り」と主張した。

非西洋文化圏やジェンダーや人種的多様性を扱う講座が次々と新設されていくスタンフォードの風潮に警鐘を鳴らすため、1995年、ティールとサックスは共著『多様性の神話…キャンパスにおける多文化主義と政治的不寛容 (The Diversity Myth: Multiculturalism and Political Intolerance on Campus)』(未邦訳)を出版する。この書は、「大学の多文化主義化」と

いう実験がいかに失敗したかを声高に主張する。彼らによれば、この実験によつて、言論の自由は制限され、ポリティカル・コレクトネスという名の新しい不寛容、反西洋的でヒステリックなカリキュラム、学生生活の政治化、多様な人種とエスニシティの対極化がキャンパスに蔓延したという。アメリカ文化の先端を行くスタンフォードで起きたこの実験の失敗は、将来の多文化社会に対する警鐘であると同書は結論付ける。

『多様性の神話』とスタンフォードにおける文化戦争は、さながら昨今のアイデンティティ・ポリティクスを巡るリベラル対オルタナ右翼の抗争を先取りするかのようで、その意味ではまさしく予言的な書であり、示唆に富んでいる。

なお、同書はティールがトランプ支持を明らかにした近年になって、ふたたびメディアによつて取り上げられるようになった。たとえば、リベラル系メディアの『ガーディアン』は、2016年10月21日付けの記事において、『多様性の神話』に言及しながら、ティールの女性蔑視やアンチ・フェミニズム的傾向を批判的に取り上げている。同書では、1991年にスタンフォード大学で起こったデートレイプ事件——17歳の新入生が酔っ払って学生寮でレイプされた事件について扱っている。著者らは、男女ともに泥酔していた状況で、どちらも責任を問えるのに、常に男側が犯罪者になるのは不当であると主張する。

また、同書では人種差別問題に対しても、人種差別は多くが幻想にすぎないと吐き捨てている。過剰なポリティカル・コレクトネスと人種的意識は、より人種間の緊張を高めるだけだという。

パラドキシカルに思えるのは、レイシズムに過剰に焦点を合わせることは、辛辣さの源泉にしかないということです。たとえば、多文化主義者が白人に対して「制度的レイシズム」や「無意識的レイシズム」などと言って、取るに足らない無形のレイシズムをあげつらう現象などです。結果として、レイシズムへの配慮は、かつては人種間の分断を終わらせる希望であったのに、現在では論争と抗争の主要な原因となっています。

（ピーター・ティール＋デイヴィッド・サックス『多様性の神話』）

現在、ティールは『多様性の神話』内の主張の一部を撤回し謝罪している。メディアはティールのトランプ支持と20年前に書かれた著書との間に連続性を見出そうとしているが、その意味ではティールの思想は20年前から一貫していると言うことができるかもしれない。言い換えれば、80年代から90年代にかけて巻き起こったスタンフォードにおける文化戦争

は、現在に至るまでティールにとって決定的な意味を持っているといえる。

主権ある個人、そしてペイパル創業へ

ロースクールを卒業したティールは、ニューヨークの法律事務所で働きはじめる。のちに「揺れ動く二十代の危機」と総括することになるこの時期を通して、ティールは競争ばかりの人生にますます疑問を募らせていった。週80時間の労働、昇進を巡る同僚との熾烈^{しれつ}な競争。そこはまさしくルネ・ジラールの哲学を体現しているような世界だった。1996年、法律事務所を早々に辞めたティールは、ふたたびシリコンバレーに戻ってきた。

ティールがニューヨークから戻ってきた年、折しもシリコンバレーにはドットコムバブルが到来しようとしていた。当時、ビル・クリントン政権の副大統領アル・ゴアがぶち上げた情報スーパーハイウェイ構想のもと、世界中を結ぶインターネットこそが来るべき情報化時代を牽引していく、といった空気が醸成されていた。たとえば、1994年にウェブブラウザ「モザイク」をベースに「ネットスケープ・ナビゲータ」を開発したネットスケープは、第一次ブラウザ戦争の先鞭^{せんぺん}をつけた。続く96年にヤフー、97年にアマゾン、98

年にイーベイが株式を公開した。今やシリコンバレーに拠点を置くインターネット関連のIT企業に世界中の注目が集まりはじめていた。

このような状況の中、ティールは1998年にペイパルを創業する。以前から電子決済市場に目をつけていたティールは、ウクライナ出身のプログラマー、マックス・レフチンとともに、携帯デジタル端末の暗号化ソフトウェアの会社を立ち上げた。レフチンが開発した暗号化ソフトウェアは、安全な電子決済を可能にするものだった。携帯デジタル端末を電子ウォレットとして使うことで、ユーザーはクレジットカードまたは銀行口座に紐付けられた一定の金額を端末間で転送することができるようになる。まさに革命的なサービスだ。

事業を開始したペイパルは、すぐさま主要フィールドを携帯端末からインターネット上に移す。当時すでに普及していた電子メールを利用することで、誰でも簡単に送金を行うことが可能になった。2000年3月の時点で、ペイパルのユーザー数は100万人を突破していた。

それにしても、どうしてティールは電子決済サービスに目をつけたのだろうか。その背景を考えると、ティールが折に触れて生涯の愛読書の一冊に挙げているとある書物の存在

が浮上してくる。その書物とは、金融評論家ジェームズ・デビッドソン (James Davidson) と貴族ウィリアム・リース＝モッグ (William Rees-Mogg) による共著『主権ある個人…情報化時代への変遷を支配する (The Sovereign Individual: Mastering the Transition to the Information Age)』(未邦訳) である。1997年に初版が発行されたこの書物は、90年代におけるティールの思想形成に決定的な影響を与えていると思われるので、少し詳しく見ていきたい。

まず、この書物が出版された1997年といえば、世界を世紀末の空気が覆っていた時期に当たることに留意したい。西暦2000年が近づいている今、世紀の終わりに西洋文明が大きな変動に見舞われるのではないか。そうした「予感」がこの書物の通奏低音を構成している。

『主権ある個人』の冒頭のパラグラフには、発明家ダニー・ヒリスによる以下のような文章が引かれている。

何か巨大なことが起こりつつあるようだ。増加しつづける人口、大気中の二酸化炭素濃度の上昇、地表を覆うネット、メガバイト換算のドル。それらすべてが世紀の向こう側の一点へ向けて、漸近線を描きながら上昇していく。——シンギュラリティの到来。私たちが知っ

ているすべてのことの終わり。私たちが知らないすべてのことの始まり。（『主権ある個人』）

つづく第一章の冒頭において、著者は2000年の到来が何らかのカタストロフィを引き起こすという想像力に西洋は取り憑かれてきたと述べ、世界は2000年で終わると推測したアイザック・ニュートン、1999年に第三のアンチクリストが現れると予言したノストラダムス、1997年に水瓶座の時代への精神的移行と新たな人類の到来を幻視したカール・グスタフ・ユングなどの例を挙げている。また、2000年になると同時にコンピュータが誤作動を起こし、世界中の経済が麻痺するのではないか、といったいわゆる2000年問題がマスメディアで盛んに騒がれていたのもこの頃に当たる。

日本に目を向けてみると、五島勉ごとうべんの『ノストラダムスの大予言』に端を発するノストラダムス・ブームがあり、オウム真理教は地下鉄サリン事件を起こし、他方で『新世紀エヴァンゲリオン』といった世紀末の空気を湛えた特異なサブカルチャーが社会現象を巻き起こしていた。『主権ある個人』は、このような時期にアメリカで出版された。

同書の主張を一言で要約すれば、「国民国家は時代遅れなのでやがて崩壊するだろう」ということに尽きるだろう。この予言的なリバリアン的終末論とでもいうべき趣の本は、

先に述べたようなインターネットの勃興期に書かれたという点でも重要だ。この時期は、国家とは別の共同体のあり方を可能にするオルタナティブな空間として、しばしばサイバースペースに対するユートピア的期待が向けられていた。奇しくも、ジョン・ペリー・バーロウ (John Perry Barlow) が「サイバースペース独立宣言」を起草したのは、本書が刊行される一年前の1996年である。

我々が作りつつある世界はどんな人でも入ることができる。人種、経済力、軍事力、あるいは生まれによる特権や偏見による制限はない。

我々が作りつつある世界では、誰もがどこでも自分の信ずることを表現する事が出来る。それがいかに奇妙な考えであろうと、沈黙を強制されたり、体制への同調を強制されたりすることを恐れる必要はない。

(ジョン・ペリー・バーロウ「サイバースペース独立宣言」)

政府によるインターネット規制の法案「通信品位法」に反対するために起草されたこの宣言文は、国家政府からのサイバースペースの独立を訴える苛烈なアジテーションに満ちている。

だが、『主権ある個人』の主張は、ある意味よりラディカルである。というのも、同書の予言によれば、サイバースペースの拡大によつて、国家システムそれ自体が遠からず崩壊するであろうとされているからだ。

そこにおいて鍵となるのは暗号化技術と電子マネーの登場だ。グローバル化した電子商取引によつて、中央銀行は通貨発行益を失い、政府は個人間の取引に介入したり、収入に課税したりすることができなくなる。言い換えれば、政府は個人から税金という名の「みかじめ料」を取ることができなくなり、代わりに貨幣の流れを個人がコントロールできるようになる。

この帰結として、税收を絶たれた政府のシステムは不可避免的に機能しなくなっていく。民主主義は崩壊し、福祉制度の解体とともに富の不平等は加速し、暴力やテロが都市を覆う。

こうしたポスト・アポカリプス的な状況、さながら『マッドマックス』、あるいは『バトル・ロワイアル』のような世界の只中に現れるのが、新たな階級としての Sovereign Individual、すなわち「主権ある個人」である。彼らは、一言でいえばニーチェの「超人」の起業家版であり、国家の制約から解放された彼らは独力で富と権力を築き上げ、ポス

ト終末の世界をサヴァイヴしていく。同書の中で、「主権ある個人」はしばしばギリシア神話におけるオリンポスの神々に喩えられている。

近代的な国民国家の秩序が崩壊していくさまを予言的な筆致とディストピアSF的な幻視力で描いてみせた本書は、まさに世紀末特有のダークなビジョンで満ちている。だが、実はこうした「西洋の没落」的なテーマはさほど珍しくなく、欧米においては常に一定の需要のあるテーマとして盛んに書かれてきた（それこそ前述の『アメリカン・マインドの終焉』も広義の「没落」テーマ本といえるだろう）。

ドイツの哲学者シュペングラの『西洋の没落』は、まさにそうした「西洋の没落」人氣に先鞭をつけた書物として特筆に値する。1918年、第一次世界大戦が終結した年に第一巻が刊行された『西洋の没落』は、当時の時代精神とリンクしていたこともあり、はからずもベストセラーになった。第一次世界大戦という世界史と西洋近代が最初に直面した「大量死」は、「西洋文明」あるいは「近代」それ自体の優位性を揺るがしかねない、ヨーロッパにとってトラウマ的な出来事であり、いみじくも当時の教皇ベネディクト十五世が大戦のさなかに評した「文明ヨーロッパの自殺」だった。『西洋の没落』は、この「文明ヨーロッパの自殺」を説明してくれる書として読まれたのだ。

『西洋の没落』は、それまでの歴史観に代わる新しい歴史観の提示と、西洋の未来についての予言からなる。ゲーテとニーチェから靈感を受けたシュペングラーは、歴史を直線的でなく円環的なものとして捉える。それまでの西洋の歴史観では、歴史は「古代—中世—近代」といった単線的なモデルに従って弛まず発展していくものとされた。このような進歩史観は退けられ、代わりにニーチェの「永劫回帰」的な円環モデル、すなわち「春（誕生）—夏（発展）—秋（成熟）—冬（死）」というサイクルからなる運命的歴史観が提示される。そのうえで、シュペングラーは未来の予言として、「西洋の没落」は避けられない宿命であると結論付ける。彼によれば、現在のヨーロッパはローマ時代の反復を生きているという。土地に根ざした「民族」の代わりに、世界都市に生きる「民衆」が台頭し、議会主義および民主主義は資本に支配されている。今後到来するであろうカエサル主義の時代においては、少数のカエサルたちが世界戦争を引き起こし、最終的に一人の勝者が世界帝国を打ち立てる。従来の国家は消滅し、少数の世界都市だけが生き残る——。

このシュペングラーによる暗い未来のビジョンは、ナチスにも影響を与えたとされるが、だが同時に先ほど見てきた『主権ある個人』が提示する未来像とも驚くほど似通っている。同書の著者らもまた、シュペングラーと同じく単線的な進歩史観に抗って、循環的なア

ンチ・タイムライン史観を提示している。彼らは、西洋文明が繰り返す世紀の終わりに大変革を経験してきたというシンクロシティに着目する。たとえば、今から約500年前、15世紀の最後の10年間にヨーロッパで鉄砲革命が起こり、コロンブスがアメリカに向けて出航している。さらにその5世紀前、10世紀の終わりに中世が始まっている。その5世紀前の終わりにはガリアの最後の軍隊が分裂してローマ帝国が滅びた。そして、20世紀前の最後の10年に、キリストが生まれている。

こうした世紀単位のサイクルを提示してみせた上で、しかし現在われわれの目の前に迫っている世紀末は、それまでのどの世紀の変わり目とも比べ物にならない大変動を引き起こすだろうと断言する。

『主権ある個人』は、シュペングラの『西洋の没落』をリバタリアン好みにアレンジしたものだと言える。国民国家は影響力を弱め、代わりに小さな企業型都市国家が統治権を握る。――封建主義2・0の到来。福祉のシステムが機能しなくなった弱肉強食の世界では、テクノロジーを手中に収め政府の支配から独立した主権ある個人が、イノベーター的なアイデアと国境なきサイバースペースを武器にのし上がっていく。本書は黙示録的であるが、同時にどこか楽観的でもあり、読みようによっては起業家向けの自己啓発書とし

でも読める。近年インターネットで生まれた「終末楽天主義者 (Apocalyptic)」なるスラングがあるが、その意味では本書はまさしく終末楽天主義的であるといえる。

ニーチェ主義とティール

同書にニーチェの名前は一度も出てこないが、しかしリバタリアニズムとニーチェの奇妙な親近性を考えてみることは有益に思える。たとえば、森村進編著『リバタリアニズム読本』所収の「ニーチェとリバタリアニズム」というテキストでは、ニーチェをリバタリアニズムの先駆者として再解釈するという大胆な読みが行われている。この章の執筆者・橋本努によれば、世俗社会における国家や教会といった、人々を「畜群」へと訓育していく大組織をニーチェは痛烈に批判しているが、この精神は、国家を否定して自由を重んじるリバタリアンとも通ずるところがあるという。

またニーチェは、平等主義を信奉する心理の根底にはルサンチマンがあると指摘している。「毒ぐもタランチュラ」という寓意を用いてニーチェが指摘するところによれば、隠れた復讐心を持つタランチュラは、権力にありつくことができないという嫉妬心から、「われわれに対して等しくないすべての者に、復讐と誹謗を加えよう」と企てる。

このニーチェの平等主義に対する批判は、どこかティールのポリティカル・コレクトネスに対する批判と似通ったところがある。彼はロースクール卒業間際に『スタンフォード・レビュー』に寄せた最後の論説の中で、経済的平等を重んじるリベラルを嘲笑し、代わりに資本家を擁護する。「強欲の代案としてのポリティカル・コレクトネスは、自己実現や幸福とは無縁であり、価値あることに取り組む人々への怒りと嫉妬にほかならない」。ティールにおいては、強欲は嫉妬よりもはるかに望ましく前向きなものであるとして肯定される。これは、ティール流の「超人」思想なのであろうか。

ニーチェは、ルサンチマンに基づく低劣な道徳を退け、いかなる道徳にも規定されない、孤独の中で創造的な精神を陶冶する「超人」の到来を歓待する。^{とうや}

「超人」とはすなわち、国家に対抗する力量をもった崇高な精神的存在である。（中略）言いかえれば超人は、規律訓練や徳育によって自らの欲望を抑制するのではなく、欲望を無際限に肯定し、そして祝福しなければならぬ。従来、肉欲と支配欲と我欲の三つは、各人が抑圧すべき悪しき欲求であるとみなされてきたが、ニーチェはこれらの欲求が、超人の理想において肯定しうることを示している。超人は、我欲をもって、巨大な組織（国家）

に抵抗する意志を示す存在である。ニーチェは超人のもつ「創造力としての自由」を擁護するために、人間を凡庸なものへとおとしめる国家装置を批判したのであった。

（橋本努「ニーチェとリバタリアニズム」『リバタリアニズム読本』）

リバタリアン流「超人」においては、「創造力としての自由」とはさしずめイノベーター的なアイディアと起業家精神であろうか。ともあれ、こういった「超人」のビジョンは、封建主義2・0の時代に到来するであろう主権ある個人を思わせるに充分すぎるだろう。もちろん、ニーチェの「超人」は市場競争を賛美したわけではない。だが、それはティールも同様だった。ティールをその他の一般的なリバタリアンから分け隔てる特異性はここにある。

先にも述べたように、ティールは「競争」を忌避していた。これはともすれば、他のシリコンバレーのリバタリアンから見れば異端と受け取られかねない。一般的に知られるように、リバタリアニズムは個人の自由を何よりも重んじる。よって、政治的立場としては、国家の役割や福祉を最大限に抑える最小国家論を、経済的立場としては政府の介入を否定し市場競争を推進する市場原理主義的立場をそれぞれ取る。

もちろん、ティールも経済的自由を否定するわけではない。しかし、ルネ・ジラルの教えに対して忠実なティールは、競争と暴力が支配するフィールドには可能性が残されていないと見なしていた。代わりにティールが重視するのは、フロンティアの開拓と「独占」である。まだ誰も開拓していない未知の領野を独力で切り拓き、野心と才能によって新天地を支配すること。そのためにはまず、今いるこの束縛と不毛の地から「脱出」しなければならぬ。

ティールがスタンフォード大学で行った講義をまとめた著書『ゼロ・トゥ・ワン』の中で、競争とはイデオロギーに過ぎないと断じられている。たとえば、アメリカの教育システムは競争への強迫観念を反映したものであり、成績による評価システムを通して生徒にステータス信仰を植え付けている。

アメリカ人は競争を崇拝し、競争のおかげで社会主義国と違って自分たちは配給の列に並ばずにすむのだと思っている。でも実際には、資本主義と競争は対極にある。資本主義は資本の蓄積を前提に成り立つのに、完全競争下ではすべての収益が消滅する。だから起業家ならこう肝に銘じるべきだ。永続的な価値を創造してそれを取り込むためには、差別化のない

コモデイティ・ビジネスを行ってはならない。

(ピーター・ティール『ゼロ・トゥ・ワン』)

よって、ティールは将来の起業家たちに、クリエイティブな独占企業を目指すようアドバイスする。こうした起業観は、彼自身が主張するようにある意味で創造論的である。ティールは、起業に際しては進化論ではなくインテリジェント・デザインの思考法が重要であると説く。ゼロからワンへの跳躍、言い換えれば無から有を生み出すためには神にも似た視点に立たなければならぬのだ。この点については、ティールは明確に反ダーウィン主義者といえる。

また、ティールは別の箇所で、経済学の数式は19世紀の物理学の理論をそのまま模倣したものに過ぎないとしながら、完全競争が成立した均衡状態をエントロピー理論における熱的死の状態に喩えている。つまり、そのような死の空間においては創造的なものは何も生まれないというわけだ。この考えには、ジラルが『世の初めから隠されていること』で示した、欲望の連鎖がエントロピーのように「死」へと傾斜していくビジョンが反響しているように見える。

話がだいぶ逸れたが、ティールがなぜペイパルという電子決済サービスを立ち上げたのか、ともあれ、これで見えてきたことと思う。

『主権ある個人』では、来るべきサイバースペースが国家を無用のものとし、国境なき電子マネーが個人に力を与えるというビジョンが描かれていた。ティールは、ペイパルを創業することで、このビジョンの現実化に貢献しようとしたのではないか。ティールが、同書の中で描かれた主権ある個人を自身と重ね合わせていたであろうことは想像に難くない。

ここで、ティールとは別の形で『主権ある個人』におけるリバタリアンの予言の現実化に貢献した人物として、サトシ・ナカモト (Satoshi Nakamoto) の名前を挙げておきたい。

サトシ・ナカモトは、ブロックチェーン、そしてその上で作動する暗号通貨 (cryptocurrency) と呼ばれる技術を発明した正体不明の人物だ。暗号通貨の最大の特徴は貨幣を中央で管理する者——たとえば中央銀行——が存在しない点にある。その代わり、ブロックチェーンと呼ばれる各取引の台帳記録をすべてのユーザーが共同管理することで、記録の改ざんや二重取引などの不正を防ぐことが可能となっている。ビットコインに代表される暗号通貨、それは国家などの中央集権的な権力に抗う分散ネットワークを介して当

事者間の直接取引を可能にする。その意味では、ティールのペイパルとも響き合う要素を持っている。他方で、ネットのプラットフォーム上に散らばる自分の個人データを一元的に自身のブロックチェーン上で管理するという、いわゆる自己主権型アイデンティティ (Self-Sovereign Identity) という考え方も近年活発化を見せている。

暗号通貨の誕生の背景には、サイファープUNKと呼ばれる対抗カルチャーの存在がある。サイファープUNK ≡ cypherpunk とは、cyberpunk (サイバーパンク) と cypher (暗号) をかけ合わせた合成語で、その名の通り暗号化技術を武器に国家権力との闘争を続けるアナキスト集団である。

市民のプライバシーと権利を守るための武器としての暗号化技術は、アメリカのハッカー文化においては常に一定の存在感を保っている。たとえば、2013年にエドワード・スノーデンのリークによって、アメリカ国防総省下のNSA (アメリカ国家安全保障局) による一般市民まで含めた世界規模の盗聴の実態が明らかになり、改めて市民のプライバシーの問題が問われたことは記憶に新しい。

サイファープUNKの起源は90年代初頭、著名なハッカーたちが集っていたメーリングリストであり、暗号通貨の誕生は2008年にサトシ・ナカモトがこのメーリングリストに

投稿したメッセージがきつかけとされている。サトシ・ナカモト含め、サイファークのメンバーは度合いの差はあれど過激なリバタリアンたちによって占められている。

ビットコインは現在ではもっぱら投機の対象というイメージを持たれがちだが、誕生初期の頃はそれこそ反体制的な領域で用いられることが多かった。たとえば、ビットコインがそのプレゼンスを上げるきつかけとなったのは、当時ダークウェブに存在していたブラックマーケット「シルクロード」だ。

ダークウェブとは、専用のソフトウェアを使わないとアクセスできないインターネット上の特定の領域——サーバーの所在地が秘匿化^{ひとくか}されたウェブサイトが数多く存在する——を指して呼ばれる。ここでは、国家や法執行機関の監視を逃れる形で取引を行う必要から、必然的にビットコインが重宝されていた。

ダークウェブを成り立たせているのは、Torネットワークと呼ばれる、暗号化技術によって通信元を秘匿化する技術だ。このサイファークのメンバーもプロジェクトに関与しているTorネットワークは、2010年代初頭の頃は「アラブの春」と、それに続くウォール街のオキュパイ運動にも貢献したとされる。インターネットが検閲されたり制限されている地域において、ジャーナリストたちが安全かつ自由に情報を発信することが

できるからだ。

しかし、結果的に「アラブの春」は中東に平和をもたらさず、代わりに誕生したのはイスラム国だった。オキュパイ運動も大した成果を残さなかった。「アラブの春」でもてはやされたSNSは、革命ではなくヘイトスピーチをもたらし、2017年にはドナルド・トランプ大統領を誕生させた。

同様にTorネットワークも、とりわけ2011年の「シルクロード」誕生以降は、アーキーな脱法空間、すなわちダークウェブとしての存在感を高めていく。そこで決定的な役割を果たしたのが、ビットコインに象徴される暗号通貨だった。

なお、サイファーパーンク運動の主導者の一人ティモシー・メイ (Timothy May) は、1992年に「暗号無政府主義者宣言 (The Crypto Anarchist Manifesto)」という短い文章を書いている。「亡霊が徘徊している。暗号無政府主義という亡霊が」という、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの『共産党宣言』のオマージュから始まるこのテキストでは、サイバースペースにおけるドラッグマーケットや暗殺マーケット、さらに政府による規制やコントロールに縛られない経済圏の登場が予言されている。言い換えれば、現在のダークウェブのあり方が1992年の時点ではば正確に予言されている。民主主義に対する苛

烈な批判者でもあるメイは、ニーチェ哲学を信奉し、暗号化技術は超人を可能にすると信じていた。彼は自分の飼ひ猫にニーチェという名前をつけていた。

ダークウェブという空間は、ある意味で『主権ある個人』が幻視してみせた国家なき後のポスト・アポカリプス的世界にもっとも近いかもしれない。ダークウェブで力を得るのは、国家でも大企業でもなく、プログラミング・コードと暗号化技術で武装した個人だ。

たとえば、「シルクロード」の運営者ドレッド・パイレート・ロバーツ (Dread Pirate Roberts : DPR) は、ユーザーからカリスマ的な人気を得ており、まさに主権ある個人として振る舞っていた。また、DPRは「シルクロード」のフォーラム上で定期的に読書会を開いていたが、そこで主に読まれていたのは右派リバタリアニズムの書だった。その中の一冊ウォルター・ブロック (Walter Block) 『不道徳な経済学 擁護できないものを擁護する』は、貨幣偽造者、投機家、ダフ屋、麻薬の売人、中毒者など、法的に禁止されている多種多様な活動をリバタリアニズムの観点から擁護した本だ。「シルクロード」はあらゆる違法薬物を扱っていたが、それとてリバタリアンからすれば充分に正当化されうるのだった。

ダークウェブ、そこは犯罪、違法薬物、児童ポルノが渦巻き、麻薬の売人、ハッカー、詐欺師が暗躍する、弱肉強食の法則が支配する無政府的空間だ。そこはあるいは、『主権あ

る個人』のダークな予言をサイバースペース上において現実化した空間と言えるかもしれない……。

とはいえ、リバタリアンの予言と異なり、ペイパルも暗号通貨も、今のところ国民国家を消滅させるまでには至っていないことは現在までに至る歴史が証明している。しかし、ブロックチェーン技術を応用することで、既存の国家という枠組みを超越しようという動きはすでにある。

たとえば、ブロックチェーン上に国家を作るプロジェクト「ビットネーション (Bination)」は、そのような試みのひとつとしてある。「ビットネーション」では、国民はブロックチェーン上に記録されたIDと紐付けされる。このことにより、国家という概念は地理的な制約から解放される。つまり、地球上のどこに住んでいようと、IDと紐付けされている限り「ビットネーション」の国民を名乗ることができる。

似たような試みとしては、エストニアのe-Residencyプログラムがすでにあり、エストニア国民に限らず誰もがエストニアのデジタルIDを取得することで、オンラインでの会社設立や銀行口座の開設といったサービスを受けることができる。

「ビットネーション」では、国籍を持たない難民に対してIDを発行する取り組みも行っ

ている。土地登記、婚姻届、出生届、パスポートなどのID、戸籍登録、財産権の記録などの行政サービスをブロックチェーンが代替する。

今後、スマートコントラクトを利用した投票機能や民事契約のシステムが実装されれば、「ビットネーション」はいよいよ既存の近代的国民国家像に取って代わる、中枢の存在しないフラットな自律分散型国家を形成するようになるかもしれない。

ブロックチェーン上に国家を作ることができる。これは言い換えれば、誰もが暗号通貨を作ることができるように、いわば誰もが国家を作ることができる、ということである。あり得る未来では、人々はもはや地理的な制約に縛られず、各人が選択したそれぞれのブロックチェーン国家に所属して生活を営むことになるだろう。そうなったとき、既存の国民国家は、果たして現在のような影響力を維持することができるのだろうか……？

「イグジット」のプログラム

だが他方で、ティールはあくまでサイバースペースを副次的なものと捉えはじめていた。2009年4月、ティールはリバタリアン系のオンラインフォーラム『Cato Unbound』に「リバタリアンの教育(The Education of a Libertarian)」というエッセイを寄稿しているが、

そこで自身の過去20年間の活動を振り返っている箇所がある。

ティールは、90年代にはペイパルを創業し、デジタルな貨幣流通のあり方を生み出し、00年代にはフェイスブックへの投資を通じて、国民国家に縛られないオルタナティブなコミュニティ空間の創出に貢献した。ティールの過去20年間の活動は、インターネットというフロンティアとともにあったといえる。だが一方で、インターネットには限界もあるという。というのも、サイバースペースはあくまでバーチャルな領域であり、往々にして現実よりも想像に偏りがちだからだ。「私の望みは何らかの形で世界に影響を与えることでした」と言うように、ティールの目線は常に現実世界に向いていた。

また、現実主義者ティールは、フロンティアとしての宇宙空間も考察しているが、そこでの評価も芳しいものではない。ロケット工学は1960年代以降飛躍的な進歩を遂げていない。現実問題として、そこには技術的な制約が深く根を下ろしている。何らかの技術的特異点が訪れでもない限り、宇宙空間の開拓にはまだまだ時間を要するであろう、というのがティールの見通しだ。

そこでティールは、サイバースペースと宇宙の間に存在する第三のフロンティアとして海上にそれを見出している。「seasteading (海上入植)」計画への関心がそれだ。

「seasteading」計画とは、国家の影響が及ばない海上に自治的な都市国家を建造しようという計画で、ここにはティールが愛読するアイン・ランドの『肩をすくめるアトラス』からの影響を認めることができる。

1957年に出版された『肩をすくめるアトラス』は、リバタリアンにとってのバイブルとも言える小説だが、その中に、崩壊しゆくアメリカに見切りをつけた一部のリバタリアンたちがコロラド山中に「ゴールト峡谷」と呼ばれる新世界を作り上げるくだりが出てくる。小説タイトル内の「アトラス」とは、ギリシア神話に登場する天球を支える巨人の神のことである。つまりはアトラスであるところのリバタリアンたちが、政府の徴税と圧迫に耐えかねて一斉にストライキを起こしたら、言い換えればアトラスが肩をすくめたら世界はどうなるのか？ という一種の思考実験の結果がこの小説というわけだ。

破滅へ突き進むアメリカと、それに見切りをつけて独立の道を歩むリバタリアン、そして彼らになぞらえられるギリシア神話の神々。こうしたモチーフを拾っていくと、明らかに『主権ある個人』と共通するところが多いことに気づくだろう。ティールはこのような書物たちから影響を受け、そして実際にこれらのビジョンを現実化しようとしていたのだ。

煎じ詰めれば、ティールにとってもっとも重要なのは脱出、すなわち「イグジット (Exit)」

のプログラムを練り上げ、それを実行に移すことだ。それはルネ・ジラルととの出会いから現在まで一貫していると言える。国家からの「イグジット」、政治からの「イグジット」、競争からの「イグジット」……等々。ティールにとっての主権ある個人とは、荒廃した弱肉強食の世界から超越Ⅱイグジットした、それらを統べる支配者のことだ。競争のフィールドから超越し、新世界の空白地帯に王国を築き上げること。競争を避け、独占を目指せ、というティールの起業論とはすなわちそういうものだ（ティールが現在のシリコンバレーに対してアンビヴァレントな違和を表明し、一定の距離を置いているのも、そこにもはやフロンティアの余地がないと感じ取っているからなのだろう）。それこそがティール流の「超人」なのだ。

その意味で、ティールの思想的先祖の一人は、「戦争」という競争の究極段階から離脱し、ジャングルの奥地で原住民を率いてみずからの王国を築き上げた、あの『地獄の黙示録』のカーツ大佐かもしれない。

「ホラー」に抗う

カーツ大佐がジャングルの奥地で小さく呟いた「The Horror」という言葉を正確に聴き取ること。ホラー、恐怖、しかし何に對しての？

ティールにとってのホラーとは、それはたとえば「死」に対するホラーであつたかもしれない。この章の主要参照源のひとつでもあるジョージ・パッカー『綻びゆくアメリカ』における、ピーター・ティールの章の冒頭に置かれた印象的なエピソードをここで引いておきたい。

ピーター・ティールが死について知ったのは三歳のときだった。一九七一年、クリーヴランドのアパートで家族と暮らしていた彼は、自分の座っている敷物に目をとめた。ピーターは父親に訊ねた。「これはどこからきたの」

「牛だよ」。父は言った。

（中略）

「牛はどうなったの」

「死んだんだよ」

「どういうこと？」

「つまり、牛はもう生きていないんだ。すべての生き物は死ぬ。すべての人間もね。いつか私も死ぬ。いつかお前も」

（『綻びゆくアメリカ』）

このトラウマ的原体験がテイルルという実存の根底を成している。死というエントロピーの法則に抗うこと、それはとりもなおさずテイルルにとって根源的な「ホラー」に抗うことを意味する。

すでに2006年、テイルルは寿命延長研究を進めるメトセラ財団に350万ドル寄付している。メトセラ財団の会長兼主任研究員オーブリー・デ・グレイ (Aubrey de Grey) は、SENS (老化防止のための工学的戦略) と呼ばれる研究財団の責任者でもあり、「アンチ・エイジングではなく、ストップ・エイジングだ」といった挑発的な発言を繰り返すことでも知られている。

不老不死の実現は、シンギュラリティ (技術的特異点) に対する畏れにも近い期待とも関わっている。たとえば未来学者でAIに関する発言でも知られるレイ・カーツワイル (Ray Kurzweil) は、2045年にAIが人類を超越し、シンギュラリティが訪れると予言している。同様に、遺伝子工学とナノテクノロジーとロボティクスの飛躍的進化によって、人類はトランスヒューマン、すなわち不死の体を手に入れるだろうと述べている。

テイルルはAIにも期待を抱いており、「フレンドリーなAI」の研究を進める非営利団

体、機械知能研究所(MIRI)に繰り返し資金援助を行っている。MIRIの設立者でA
Iリサーチャーのエリーザー・ユドコウスキー(Eliezer Yudkowsky)は、シンギュラリティ
以降の世界において人間は、友好的な知性を備えたスーパーコンピュータに意識をアップ
ロードすることで不死になると考えていた。

これらに共通して見られるのは、近い未来において歴史に決定的な「切断線」が訪れる
という強迫観念にも近い予感だ。たとえば、近年見られるそうした「切断線」の議論のひ
とつに「人新世(Anthropocene)」がある。

「人新世」を最初に称えたのは、オゾン層破壊の研究で1995年ノーベル化学賞を受賞
したパウル・クルツツェン(Paul Crutzen)である。私たちは、最終氷期が終わった1万8千
年前に始まった完新世という安定の時代を生きてきた。だが今や、人口とエネルギー使用
の増加、工業化が加速度的に進んだ20世紀半ばの「グレート・アクセラレーション」を経
て、人間の活動が地球環境に不可逆的な影響を与える時代、すなわち「人新世」の時代に
突入しているのだという。

歴史学者のディペッシュ・チャクラバルティ(Dipesh Chakrabarty)は、人新世は大部分が
人間の活動の帰結であるが、しかし今や私たちは人新世の影響を制御できない状況にある

と主張する。

このような視点に立ったとき、人新世のプロセスの不可逆的かつ破壊的な帰結としての「絶滅」というビジョンが見えてくる。実際に、人間による地球環境破壊がこのまま進めば、2100年までに全生物種の半分が絶滅するという予測もある。もちろん、何も手を打たなければ人間も遠からず「絶滅」という運命から逃れることはできないだろう。

近い未来における「絶滅」という決定的な切斷線。このダークなシンギュラリティのビジョンを共有するシリコンバレー^{かいわい}界限の億万長者は少なくない。ペイパル・マフィア（ペイパルの創業期に関わったメンバーを指す）の一人イーロン・マスク（Elon Musk）は、スペースXの設立を通して民間の宇宙船開発を推し進めているが、その目的のひとつは地球からのイグジットに他ならない。

マスクによれば、人類は地球とともに近いうちに絶滅する運命にある。これを避けるためには、人類は宇宙に脱出し多惑星種になる他ないという。その足がかりとして彼が目下の関心を寄せるのが火星移住計画だ。マスクの見通しによると、2020年頃までに乗組員の選別と訓練、推進装置やシステムの開発が終わり、その後宇宙船と推進ロケットのテストを重ねて、2030年代前半頃を目処に人を火星に送るという。

西洋の没落、綻びゆくアメリカ、国民国家の解体、人新世、絶滅、そして死――。

これらに共通するのは、つまるところ「終末」の予感、あるいは「ホラー」である。テイルはディストピアSFに親しんでいたが、それらが近いうちに現実のものとなることが予感されていた。国家、文明、人類、地球、すべてが緩やかに衰退と滅亡へと傾斜していく……。

その意味で、2001年の9・11はテイルだけでなくアメリカにとっても決定的な意味を持つ経験だった。2004年、スタンフォード大学でルネ・ジラルを囲んで開かれたシンポジウム「政治と黙示録 (Politics and Apocalypse)」は、まさに9・11以後におけるアメリカ政治の再検討をテーマにしていた。このシンポジウムは2007年に同名のタイトルで書籍化されているが、シンポジウムの発表者の中にピーター・テイルの名前を見つけることができる。「シュトラウス主義の時代 (The Straussian Moment)」と題した発表においてテイルは、9・11という経験は西洋近代の遺産である「啓蒙」というプログラムの完全な失効を決定づけるものであった、という見方を示した。イスラムという西洋近代の

「外部」からの出現者に対抗するためには、アメリカもまた西洋近代を基礎づける諸々の時代遅れの価値観を根底から解体しなければならない、という。ここにはティールのもつとも率直な政治思想的表明がある。ティールは言う、17世紀後半以降、つまり啓蒙の時代以降、西洋はヒューマニズムという普遍のかつ偽善的な価値観のもと人間の根源的なあり方を覆い隠してきた。その根源的なあり方とは、人間に潜在する暴力性と悪徳である（もちろんこれはジラルルの教えでもある）。ティールからすれば、オサマ・ビンラディンとは、モダニズムが抑圧してきたものの文字通り暴力的な回帰なのだった。そして、この西洋の「外部」からの暴力の洪水Ⅱテロリズムが、我々を健忘症的な眠りから叩き起こすだろう、何かのあやまちから「啓蒙」と名付けられたこの深い眠りから……云々。ここからティールは、近代的思考に取って代わるべきオルタナティブな思考として、カール・シュミットとレオ・シュトラウスを召喚するに至る。つまるところ、ここで要請されているのは、ある種の「例外状態」であり、またその「例外状態」において立ち現れる主権ある個人（！）に違いないのであるが、それはともかく。

ともあれティールは、「平等」と「デモクラシー」というドクトリンに束縛された西洋の衰退と滅亡は避けがたいと考えていた。そして、9・11の出来事はその観念を確信へと変

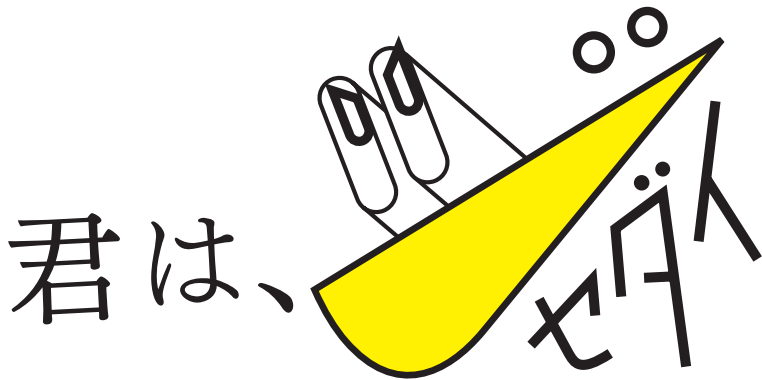
えた。

他方で、現在ティールは来る西洋の崩壊からの「イグジット」としてニュージーランドに目をつけており、すでにニュージーランド国籍も取得している。この美しく、かつ資本家にとって魅力的な税制を敷いている地に注目しているのはティールだけではない。彼と同じく「終末」の予感を感じ取った億万長者たちが、この地に広大な土地を買い、そこに巨大な地下シェルターを建造して差し迫るアポカリプスに備えているという。

終末論者としてのピーター・ティール。彼の思想は、別の形でインターネットの仄暗い空間に誕生した一群の思想に受け継がれている。

——新反動主義。ティールの「自由と民主主義はもはや両立しない」というテーゼに靈感を受けたシリコンバレーの起業家カーティス・ヤーヴイン、そしてそこにイギリスの異端的哲学者ニック・ランドが加わり、「暗黒啓蒙 (The Dark Enlightenment)」として体系化されたこの新たな反動の思想は、現在のオルタナ右翼にも影響を与えているとされる。

続く章では、この「暗黒啓蒙」と新反動主義に焦点を当てながら、彼らの思想に迫っていくことにしたい。



君は、

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!